

動き出した 東北

— ② —

大津波は凄まじい力で内陸に向かって襲い掛かり、ある地点を境に、今度は引き潮に転ずる。

このある地点から少しでも離れていれば被害を免れるが、(株)日本遺伝子研究所の本社・研究施設棟は、まさにこのある地点の最後の部分に位置していた。



中川原寛一氏

検査・解析装置は海水に浸り、わずかに残った顕微鏡類は心無い人によって盗まれてしまった。「ついでないな」と同社代表取締役の中川原寛一は言う。これまで築き上げたすべてを失い、茫然自失の中で、「ついでないな」は正直な気持

(株)日本遺伝子研究所

ちであらう。

でも、中川原は言葉が続ける。震災を契機に

これまでの経営理念は崩壊し、新たな指針が芽生えた。形あるものはいつか壊れるが、壊れないも

業務とする。設立は平成6年。今で言うベンチャー企業である。

時代はバブルがはじけた日本経済の下降局面。国立西多賀病院(東北大学医学部第一医化学講座

いのであろう。

それでも染色体に関する分析・解析では、大手で1、2カ月要するところを、2週間で結果を出した。スピードと実績から信頼が広がり、設立2

育成である。高品位な装置を導入すれば、より精度の高い結果が得られる。問題は得られた結果をいかに読み取り、分析・解析評価を下すかである。

育成である。

そんな折、大学の独立行政法人化で大学からの発注が激減。次なる商品

そんな折、大学の独立行政法人化で大学からの発注が激減。次なる商品

微鏡類は持ち去られてしまった。

社員にも家庭がある。安否確認の必要性からも、帰宅を命じた。荒れ果てた社屋に中川原一人が残った。

子は親の背中を見て育つという。会社も社長の背中、将来の命運が決まる。一人で瓦礫の撤去作業を続ける中川原の元に、一人、二人と社員が戻り始めた。

この時、中川原の中で既存の経営理念が崩れ、新たな指針が芽生えたと

いう。新社屋に移転し、4月18日から営業を再開。利益追求のみの経営理念は崩れ去った。自社の研究成果が何らかの形で、社会にフィードバックできるような姿勢で臨みたい。収益はあくまでも、一生懸命に働いたご褒美と考えるようになった。

今回の震災は多くの人々をどん底に陥れた。しかし、その中で、新しい生き方を見出した人々もまた少なくないと思う。(文中敬称略)(産業タイムズ社事業開発部 松下晋司)

装置は浸水、顕微鏡は盗難

有能な人材が会社を再生

のもある。それが情熱であり、人の情である。そこに立脚した経営指針があっても良いと考えるようになった。

日本遺伝子研究所はその社名の示すとおり、DNA・RNA合成、染色体解析、遺伝子解析を主

で研究(で勤務していた中川原は、周囲の反対を押し切って起業に踏み切った。

当然、経営は自転車操業。毎日の帰宅は朝の4時で、数時間後の朝7時には出社する。寝食を忘れて働くとはこのことを

年目から黒字に転換。経営は右肩上がりの軌跡を描き続けた。

経営が安定する中で、中川原を悩ませ続けたのが、人材教育。専門家の

戦略の手を模索していた中で、今回の震災が襲ってきた。

瓦礫の撤去に明け暮れる日々が続く。分析・解析装置は海水に浸り、顕

壊れた装置、盗まれた装置は買い換えればよい。借金すれば、新規導入できる。しかし、有能な人材は取り替えることのできない会社の宝であ

る。